

講演会「アメリカの編集者の視点から
- 子どもたちと共に創造の喜びをわかちあう人生」

平成 16 年 3 月 4 日
アン・ケイ・ベネデュース
Ann Keay Beneduce

エリック・カールは、ヨーロッパで長年過ごしたのち、1952 年、23 歳の誕生日の直前に彼が生まれた国、アメリカ合衆国に戻ってきました。

ニューヨークに到着したとき、彼はスケッチブックを抱え、ポケットには 40 ドルを持ち合わせていただけでした。

その 50 年後の 2002 年 11 月には、エリック・カール美術館が多くの人々の賞賛を受けながらオープンしました。この 2 つの出来事の間、エリックは絵本や物語を創造する仕事に情熱をもってとりくんできましたが、彼の作品はいまでは世界中の子どもたちに知られ、また愛されています。

彼はニューヨーク州シラキュースに生まれました。そこでの楽しい子ども時代、特に小学校で経験したことは、今もはっきりとカールの心の中にきざみこまれています。陽光あふれる教室には、大きな何枚もの紙や太い絵筆やカラフルな絵具があり、絵を描くことが大好きだった彼にとって、この教室で自由に絵を描くことが唯一の楽しみでした。その後、担任教師の強い勧めもあり、母親も彼の才能を大事に育てようとなりました。

彼がちょうど 6 歳のとき、ドイツからの移民であった彼の両親は、ドイツに帰ることになりました。このころは非常に悪い時期で、ヒットラーと彼のナチス党が台頭してきていました。

ドイツに帰った当初は、シュトゥットガルトの郊外にある、エリックの祖父の 4 世帯住宅に住みました。その 1 世帯分は彼の家族が占めました。ここでの新しい生活は、エリックにとって、楽しみのないものではありませんでした。彼は近くの田舎の道を父親と時間をかけて歩くのが好きでした。父は、エリックの自然と美術に対する興味を、熱心に分かち合ってくれました。夏休みに親戚の農場を何度も訪れたことも忘れられない思い出となっており、この小さな坊やは、農家とそこで働く頑強な人々、そして牛や他の動物たちが大好きでした。

第二次世界大戦の勃発とともに、エリックの父はドイツ軍の兵役に召集され、戦争が長引くにつれ、エリックと母の生活は厳しくなっていました。父からの便りはなく、母子は父が殺されてしまっているのではないかと恐れていました。子どもたちは都会から避難

し、エリックは黒い森の近くのシュベンヒンゲンに住む家族としばらく暮らしました。そして連合軍が近づいて来ると、彼と彼のクラスメートたちは、防御のための塹壕を掘るために、ライン川沿いのジークフリート陣営に、戦争の捕虜や老人たちとともに移動させられました。再びシュトゥットガルトで母と一緒にいるまで、それはエリックにとっては苦しい経験でした。彼はそのことを滅多に話そうとはしません。

戦争が終わって1年後、エリックは父から手紙を受け取りました。それにはたった25の言葉しか書かれていませんでした。しかし、ソ連で捕虜になってはいたが、父は生きていました！アメリカ軍がシュトゥットガルトを占領すると、エリックはアメリカ軍政のデナチフィケーション(非ナチ化)部に書類整理係としての職を得、そこで殆んど忘れていた英語に磨きをかけました。

数ヵ月後に高校が再開され、エリックは学校に戻りはしたものの、その勉強の殆どが嫌いでなりませんでした。しかし彼の芸術に対する卓越した才能は、ある美術の教師によって育てられました。その教師は彼に、特徴的で型にはまらない彼自身のスタイルで描くように勧めたのです。シュトゥットガルトのAkademie der Bildenden Kunstで、グラフィックアートの厳しい訓練が4年間続きました。エリックは、小学校から高校までの抑圧された10年間を、奮い立ち、元気付けられた時期としてはっきり記憶しています。まだ一美術学生ではありましたが、エリックはアメリカ情報センター(アメリカ・ハウス)のために、一連のポスターを製作しました。卒業すると、彼はファッション雑誌の宣伝部のアートディレクターとしてしばらく働きました。そして1952年にアメリカ合衆国に帰国することになり、ずっと持ち続けていた夢がやっと果たせるときがきたと感じました。

その頃のニューヨークは、若い芸術家にとって刺激のある場所でした。活気があって、国際的にも芸術の世界の中心地でした。しかしエリックはまず生計を立てることを考えなければなりませんでした。彼の仕事口を見つける方法は、彼のポスターのスタイル同様直接的でした。彼はニューヨークのアートディレクターが作品を発表している会に出かけて行きました。当時フォーチュン誌のアートディレクターだったレオ・レオニの作品に敬服していたからです。

そしてレオ・レオニにかけた1本の電話から、彼の昼食に招かれ、さらにニューヨーク・タイムズのアートディレクターに紹介され、その人にグラフィックデザイナーとして雇われました。アメリカに戻ってからわずか2週間のことでした。ずっと前から彼はレオ・レオニに親しみを感じていて、自分のよき指導者であると思っていました。そして自分の好きな仕事を得ることができたのです。

しかし、戦争が終わったとはいえ、徴兵は終わっておらず、数ヵ月後にエリックは、彼のサムおじさんから挨拶状を受け取りました。皮肉なことに、彼のドイツ語の堪能さゆえに、すぐにシュトゥットガルトに帰り、アメリカ軍の特別任務に就くことになったのでした。除隊するとすぐエリックはアメリカに渡り、ニューヨーク・タイムズでの仕事に戻りました。シュトゥットガルトで彼は若いドイツ人女性のドロテアと結婚し、その後数年間

にふたりの子どもをもうけました。娘のクリスティンと息子のロルフで、ふたりとも今では才能と想像力のある大人になりました。しかしエリックとドロテアとの間は、1963年に離婚によって終わりを告げました。

それからの時期というのは、エリックにとって仕事の上でも、また私生活の面でも、たいへん厳しい時期でした。その前に彼はタイムズをやめ、広告代理店の職についていましたが、本当にしたいアートの仕事からますます離れていくのを感じ始めていました。そこで彼は退職を決意し、製菓の広告のためのイラストを専門とするフリーランスのデザイナーとして、また広告アーティストとして仕事をする事になりました。その広告作品のひとつが、ビル・マーティンの目にとまりました。ビルは自分が書いた『くまさん くまさん なにみているの?』のイラストレーターを探していたのです。

エリックはこの本のイラストを描いて、「熱中した！何か特別なこと、本の中にある喜びを子どもに示すことが可能なのだ！」と気がついたといっています。

これがきっかけとなって、エリックが本来目ざしている仕事への扉が開かれました。エリックはこの自己発見の瞬間をつぎのようにいっています。「戦時中のドイツでの長く暗い成長期、そこの学校での厳しい強制的規律、義務に忠実でなければならない広告業界で果たした仕事、私をしっかりと掴んでいたそれらの全てから、私の内なる少年がついに解放されたのだ」と。押さえ込んでいたものが「いきなり根絶され、抑圧されていたものが」喜びとともに、また戻ってきたのです。

しかしながら、他の人々によって書かれた文章に絵をつけることは、エリックにとって満足を得られるものではありませんでした。彼の創造の喜びが再び目覚めた今、絵だけでなく、ストーリーにもそれは溢れ始めました。『1、2、3 どうぶつえんへ』（これは、光栄にも、私が1968年に出版したのですが）は彼の特徴的なスタイルの多くの要素が現われています。

見事にデザインされた表紙には、大きく開いたライオンの口いっぱい活字が印刷されていて、彼のポスターのテクニクの影響が反映しており、折り込みページには、それ以降彼が多くの本の中で使用した革新的な型の兆しが見えています。エリックはまだ英語で書くことにためらいがあったので、『1、2、3 どうぶつえんへ』には全然文章がありません。（簡単な数字のレッスン同様、言葉はなくとも、カラフルで表現に富んだ絵を見るだけで、ストーリーは簡単に読めるし理解できます）

次の作品『はらぺこあおむし』やそれ以降に彼が書いた全ての作品の中には、読みやすい散文のスタイルと特徴的なグラフィック・スタイルが用いられています。それらは大胆にデザインされた薄い織物のコラージュで、カラフルなアクリルで描かれています。

世界中の子どもたちが、これらの絵本に魅了されたのは、不思議ではありません。というのは、どの絵本も非常に若い読者たちの感情や関心事に対して、エリック・カールが深い感受性をもって創りあげたものだからです。

彼の絵本には、ユーモラスな文章の中に、小さな読者のための教訓や貴重な知識の塊が

含まれています。希望、勇気、友情、公平さ、そして愛が彼のテーマであり、彼はまた小さな子どもたちの感情、例えば寂しい気持ちや、新しい家に移るときとかはじめて学校に行くときのなんだか怖いような気持ちなどを、感情をこめて（そして肯定的に）表現しました。彼が描いた全ての絵本の中で、彼は彼自身の感情の豊かさや創造力を読者たちと分かち合っているのです。

1973年、エリックはバーバラ・モスリンと結婚しました。幼い子どもたちへの教育における、彼女のプロフェッショナルな仕事は、彼自身の関心事を完全に補うものでした。その間、彼は70以上の美しい絵本の絵を描きましたが、そのうちのほとんどは、文章も彼が書きました。そして、彼の創造力は、時には32ページという絵本の限度を跳び越えてしまいました。

他の分野でも、この精力旺盛な芸術家は、絵画、彫刻、プリント作り、さらには家具やビルディングのデザインなどにも挑戦し、楽しみました。

2001年に、彼はモーツァルトのオペラ「魔笛」のセットと衣装のデザインを担当しましたが、彼にとっては新鮮で楽しい経験となりました。2002年には、カール夫妻は、世界中からの児童書のアーティストの業績を顕彰するため、エリック・カール美術館をマサチューセッツ州のアムハーストにオープンしました。この美術館には、もちろん大人たちの関心を惹くものも多くあります。しかし、おそらくもっと大切なことは、エリックが、この美術館を、若い来館者たちが示唆を得られるような、素晴らしい場所にしようとしたことです。

そして2003年、エリック・カールは、長年にわたり子どもたちと創造の喜びを分かち合うことに尽くした業績が認められ、アメリカ図書館協会のローラ・インガルス・ワイルダ一賞を受賞しました。